

河上 肇・高田保馬記念講演会

「文化経済学と経済社会学」

2007年11月20日夕，時計台記念館百周年記念ホールで，文化経済学と経済社会学をテーマとして，河上 肇・高田保馬記念講演会が開催された。河上記念講演の講師は池上惇本学名誉教授で，演題は「河上肇の文化経済学志向——『貧乏物語』から」，高田記念講演の講師は富永健一東京大学名誉教授で，演題は「高田保馬先生の勢力経済学と今日の経済社会学」であった。司会は私がつとめた。なお，これは，京都大学21世紀 COE プログラム「先端経済分析のインターフェイス拠点の形成」の企画に経済学会が共催団体となったものである。

池上教授の講演は，『貧乏物語』（1917年）で河上が推奨した人心改造による社会問題の解決という提言を，生活の芸術化を唱えるラスキン思想と結び付け，文化芸術活動の経済学へと発展させようとするものであった。池上教授の見解では，河上肇はマルクス主義者となったあとでも，経済的価値にとどまらない価値を求め続けていたのである。

他方，富永教授は，社会学者として出発した高田保馬が，支配的理論と異なる独自の経済学説として発展させようとした勢力説経済学を，経済学の領域のなかにおける社会学的な理論であるとして，それを経済社会学とみなしていいと論じた。富永教授によれば，現在の経済社会学は高田から独立して発展したが，多くの観点を共有する高田の勢力説経済学からいまなお学びうるのである。

ふたつの講演は，戦前戦中期における河上肇と高田保馬の思想と業績に新しい光をあてるとともに，それを現在の経済学・社会学の探求に生かそうとするものであった。学生，研究者だけでなく，一般参加者を含め200人以上が記念ホールに集まり，講演に耳を傾けた。以下に掲載する2点の論文は，池上教授と富永教授から『経済論叢』のためにいただいた講演の原稿である。あらためて両先生のご厚意に感謝します。

（八木紀一郎記）